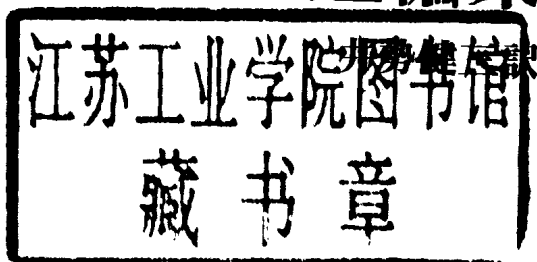


アイランド 短編集

井勢健三訳



アイルランド 短編集



京都
あほろん社

アイルランド短編集

一九九〇年四月十五日 初版発行

定価二、八〇〇円
(本体二、七一九円)

訳者

井 勢 健 三

発行者

伊 藤 武 夫

印刷所

(株)共同印刷工業

発行所

株式会社 あ ぼ ろ ん 社

〒602 京都市上京区河原町通今出川上ル青龍町二〇九

電話(〇七五)三三一一七七―七七

振替口座・京都三―八四五九番

©一九九〇 井勢健三

落丁本 乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-87041-525-9 C0098

目次

赤い靴の婦人	イタ・デリー	1
遺言	メアリ・ラヴィン	25
サラ	メアリ・ラヴィン	55
気の毒な女 ひと	エドナ・オブライアン	75
車中にて	フランク・オコナー	89
汚れなき子供	フランク・オコナー	123
谷間の静寂	ショーン・オフエイロン	155
行商人の復讐	リーアム・オフラハティ	197

肝 試 し	リーアム・オフラハティ	227
運命のらっぱ	ダニエル・コーカリ	251
ミソサザイとコマドリ	ベネディクト・カイリー	263
殉教者の冠	フラン・オブライアン	287
三人組	ジェニファー・ジョンストン	299
四月馬鹿	エデイス・サマーヴィル及びマーティン・ロス	313
父の死	マーガレット・バリントン	335
ラッパズイセン	エリザベス・ボウエン	351
暗い一日	エリザベス・ボウエン	371
北アイルランド問題の理解のために	I・ヘーデン	391
——その歴史的背景について——		
あとがき		401

The Lady with the Red Shoes

赤
い
靴
の
婦
人

イ
タ
・
デ
リ
ー

イタ・デリー

Ira Daly (1945-)

リートリム州に生まれる。最初の短編集『赤い靴の婦人』が一九七九年に刊行された。比較的新しい作家。他の作品は『新アイルランド』誌、『現代アイルランド恋愛小説』、『門』、『批評』などに発表されてきている。

アイルランドの西部は、小学校で誰もが習う話だが、クロムウェルがアイルランド征服に成功後、なお宗教を異にして反抗する者たちを追いやった、曰くのある地域である。そこは当時も今も瘦せた不毛の地で、荒涼としても寂しく、大西洋が三千マイル以上にも渡ってためこんできた猛威の丈をこめて海岸線を打ちつける、そのあまりの激しさに身をすくめるようにしている。だが、アイルランドの西部はその一方で、息を吞むほど風光明媚にもなる。四月のよく晴れた朝などは、ハリエニシダやクロバーの香りが辺りに充満し、見渡す限り人気のない景色の中で、蜂だけがせつせと飛び回っている。こうした中にいると、まるで天国の香りを感じがする。

我が一族が、この西部にこれほどの強い愛着を持っているということは皮肉だが、僕にはすこぶる愉快な話である。我々の祖先は周知のとおり、クロムウェルと一緒にやって来た歩兵で、勇敢に戦った功績によりたつぷり報酬を手にし、以来決して昔を振り返ろうとしないのだ。そして毎年復活祭には、我が家はダブリンを離れて西部に向かい、メイヨ州北部にあるマカンド

リューズ・ホテルで二週間を過ごす。これは祖父の代に始まった我が家のしきたりで、今ではある種の神聖さを帯びてきているくらいだ。どんな事情があろうとも、この儀式を妨げることには許されない。それゆえ二十五年ほど昔の四月のある日、僕とジュディスが結婚したときも、ハネムーンをそこで過ごすのはまったく当然のことに思えたものだ。それ以来復活祭のこのホテル参りを僕たちは欠かしたことがなく、ジュディスがこの旅行にいささか気乗りがしないことがたまにあつたときも、僕がことのほか楽しんでることを知っているから、折れて一時の退屈を我慢してくれた。そのお返しに一度、ジュアン・レ・パン行きのお供をさせられる羽目になったが、そんな経験は一度で充分、二度と繰り返すのは愚の骨頂と決めている。

マカンドリューズは世界の謎の一つである。キルゴリーの町外れに立っていて、小さな村と海を見下ろし、その歴史は十九世紀末に溯る。小塔のある赤レンガ造りの大きな四角のゴシック建築だが、ゴシック再現も誇張が過ぎて嫌味の感はある。それでいて丘の上にポツンと立っているその巨大な輪郭を目にするたびに、僕の胸は高鳴り、脈が早まってくる。このホテルがキルゴリーの町よりも昔からここに立っていて、この周辺に村が形成されていったものか、それとも先にキルゴリーの町があつたのか、その辺りの事情は誰にも分からない。しかし、たしかに辺鄙な場所^{へんぴ}に建てたものである。なにせ町や教会はもちろん、海岸からでさえ何マイルも

離れているのだ。大西洋を見渡す岬にあるといっても、崖は切り立ち海もこの辺りは危険なため、ボートに乗るにしろ、泳ぐにしろ、思うようにならない。こんな場所にホテルを建てるのも変な話だが、それ以上に腑に落ちないのは、一世紀近くもの間、このホテルが商売を成り立たせていくうえで変わり者の客にこと欠かなかったということだ。父は子供の頃、よく汽車でやって来た。本線がダブリンからウェストポートまで走っていて、そこから先は支線がホテルまで——よろしいかな、キルゴリーではないのですぞ——ホテルの敷地の中まで延びているのだ。

「マカンドリューズ行きのお客さまはおられますか」ウェストポート駅で乗客が降りると、赤帽が大声で叫んだものだ。三、四両の一等車からなる玩具のような汽車に案内されると、ここから十五マイルの分岐線を走り、気品のある石の手摺りのついたマカンドリューズの大玄関の目と鼻の先に降ろされる。

最近、客は車でやって来るが、その玩具のような駅は現在も残っている。僕は自分の乗って来たダイムラーが、ガレージ代わりの洞窟に消えて行くのを見るとほととずる。他の客の大半も同じような気持ちを味わっているようで、車で来ても後は足を使うため、庭や周囲が車の排気ガスと無縁になるのが嬉しい。僕たちマカンドリューズの常連は時代遅れの変わり者で、多

分同じ穴の貉しじななのかもしれない。僕たちを気取屋呼ばわりする者もいるだろう。よろしい、自分の好みを実行に移すことを気取屋と言うのなら、僕は自分がその一人だと認めよう。だが、僕には昨今、平等主義という名で罷り通っている、店員やタクシー運転手の無作法や横柄な態度には我慢がならない。それにウェイターたちから馴れ馴れしくされるのも不愉快だ。連中にはときに、客の背中をポンと叩きたい気持ちをかろうじて抑えているように見受けられる。バーでカクテルを売るなどもつての他で、あの何の心配もない、とりとめのない会話の真っ只中にいると、僕は身の置場に困ってしまう。そつと、静かに、お互い距離を置くことを僕は大切にしている。控え目で慎重深いこと、これがマカンドリューズの拠つてたつ理由のようである。同宿の客の名前はたいてい僕は知っている。彼らも子供の頃からここに来てゐるのだ。それでも、そのうちの誰かとホテルのどこかで再び出会つたところで、丁寧な挨拶は別として、あらゆるつきあひはなしで済ますことができるものと安心しておれる。品位と個人のプライバシーに対するこのような配慮は、近頃の営利を先行するホテルでは得がたい。

今年、ジュデイスは病気で、私との同行を見合わせた。病気という言い方はいささか大袈裟で、実際に病氣なら妻を一人にしておくことはない。しかし幾分体調が優れないのは事実で、ロンドンにいる姉がダブリンに来てゐることもあり、メイヨ行きは僕一人にして、彼女は姉と

残ることにしたという次第だ。実のところそうなってくれて少々ほっとした。というのも、陽気で社交家のジュディスの身になってみれば、僕のような何の変哲もない木偶でくの坊と長年連れ添うことがいかに大変なことか、身に染みていただろうからだ。妻が楽しめる機会が得られて僕は嬉しいし、妻もエリノアと姉妹水入らずで過ごせる方がいいに決まっている。そうは言うものの、妻がいないことが気になりだしてくるのは困ったことだ。要するに、僕という男は寂しがり屋の例に洩れず、数少ない最愛の者と一緒でないと心細くなる性質なのだ。

しかし、マカンドリューズの魔力が再び首をもたげるのは、第一日目の朝である。朝食の席について、マーフィーがいつもの威厳を備えた様子で食堂を取り仕切っている姿が目に入るときののだ。マーフィーは現在でかれこれ三十年以上も、ここの給仕長を務めてきている。気配りのできる給仕長というよりは、執事か王室付従者といったところが僕のマーフィー観である。客一人一人に対する心配りは誠実で、毎年再会が果たせると、マーフィーは懐かしそうに喜色満面となる。

今や僕に挨拶しようと近づいて来た。

「おはようございます」

「おはよう、マーフィー。また会えて嬉しいよ」

「こちらこそ、お会いできて嬉しゅうございます。失礼でございますが、今年はモンゴメリー夫人はお越しにならないのでございますか」

「そうなんだよ」

「それはどうも。でもどうぞゆるりとお過ごし下さいませ。今朝は鰯にしんの燻製などいかがでございますいましょう。格別のお味でございますが」

このような遣取りが、これから先二週間の僕と世間とのつきあいの限度になろう——折り目正しく、立ち入らず、距離がありながらなおかつ相手の言動は逐一予測できるつきあいなのだ。

これなどマカンドリューズとする経験のほんの一部に過ぎないが、このおかげでリラックスでき、くつろげて爽やかな気分になれるのだ。つまり、心が和んでゆく課程だと常々思っている。

さつそくいつもの日課を再開することにした。着慣れた、古い服に再び手を通す際に覚える、あの安心感とありがたさを感じながらことを始める。やや遅いが心のこもった朝食をとり、村まで往復の散歩に出かける。その後、図書室で一、二時間、ボズエルの楽しい作品を相手に過ごす。この作家は充分に暇のある環境にあつて始めて、読んでいて楽しい。因に、ダブリンにいたるときボズエルを読むことは決してない。昼食後、午後は庭のデッキチェアで、海を眺めたり、うとうとしたり、夢想したり、あてもなく過ごす。夕食後、再び散歩に出るが、このとき

は朝よりも精を出し、海岸に沿つてものの二マイルも歩く。そしてマカンドリューズに戻つてから、一日の終わりの一杯としてポトワインを口にし、探偵小説のおもしろいを持つて早めにベッドに入る。こういった日々のこの上ない幸福感は、口では説明しがたい。ことに雨の気配のなさそうな午後の様子は、筆舌に尽くしがたい。よくデッキチェアを風の当たらない場所を持つて行き、座つたまま何時間も大西洋の止むことのない動きに見とれたものだ。光が変化する有り様——青から緑へ、そして緑から灰色へ——を見ているうちに、ときたま、カモメが視界を横切つたりする。顔を上げて、大空高くカモメが飛翔するのを目で追つたものだ。こういった午後を二日過ぐすと、物ごとのバランスが再び正常に戻ってくる。寄る年波を意識したり、世間から時代遅れと見られてはいはまいかと思つていたことがさほど苦痛でなくなり、この大西洋の端にいることで、一種の安らぎが感じられてくる。

だが一方、僕は常日頃世間と反りが合わず、そのため若いときでもマカンドリューズは僕にとって避難所であり、安息所であつた。だから、年をとつて不安が募るにつれ、マカンドリューズは一層ありがたい存在になつてきた。ここにいる限り、あの自信過剰で攻撃的な若僧どもや、深紅のマニキュアをした小娘たちや、連中の果てしない軽薄なおしゃべりから逃れることができる。息子のエドワードは美容師と所帯を持つているが——美容師という職業も当節、

たしかにそこそこの社会的地位を占めている——この愚息の言によれば、僕の唯一の問題は、始末に悪い俗物老人だと言うのだ。これでは僕が全く社会の除け者だと言うようなもので、最低の人種、葬りさるべき人間とも言わんばかりだ。人間は誰でも大なり小なり俗物根性を持ち合わせているものだが、息子は僕のようなタイプの俗物がもう時代遅れだと言いたいのだ。息子には労働者階級や黒人の友人がいるが、くだらない友人はいない。マカンドリューズがごとき特権階級の砦で休暇を過ごそうなど夢想だにしないし、かといってコサ・バーバーくんだりに出かける気持ちとてさらさらないと言う。ギネスの杯は重ねても、甘いワインには見向きもしない。おまけに僕たち父子の相違は、息子には洞察力が備わっていて、僕は俗物だと言うのだ。

現代の社会学者は誰でもこれを十把一からげにして、「世代の断絶」と呼ぶが、先にもふれたように、僕にはエドワードとの断絶に留まらず、同世代の大半の人間との間にも常に断絶があるのだ。「この世の関節がはずれてしまった」という感情を、絶えず抱いているのは辛い。もつとも、マカンドリューズで美味しい夕食を心待ちにしながら、シェリー酒をちびちび飲みつつ腰を落ち着けていると、自分自身や息子の馬鹿さ加減、さらに人間一般の白痴的言動が嗤えてくる。これがために、マカンドリューズは僕にとってかけがえのない存在となり、また毎

回ここを離れづらくしている原因にもなっているのだ。俗世間に戻る前になるといつも不安が増してくる。今回の休暇も終わりに近づき、とうとう最後の夜、席について夕食を待つうちに、自分がしだいに落ち着きがなくなり、ふさぎこんでいくのが分かった。そこであまたの老人が愛飲するネクター——年代ものの赤のワイン一本——で自らを慰撫することに決めた。今やマーフィーからの銘柄にするか助言を求めておきながら、一瓶空けると確実に一晚眠れなくなると分かっているのに、いつもの僕に似合わず無謀にも、値段同様それさえも無視して飲むことにした。不眠よりつらいことは、一つに留まらなかったのだ。

夕食頃までには外の光も変化して、大西洋からの柔らかな不透明な青さが、食堂の大きな窓越しにどつと入り込んで来た。アイルランドの黄昏であり、一日の中で一番美しい時である。

若い頃、西アフリカで送った数年間、忘れがたく思われた時間帯である。この時刻になると——もちろん手にした酒も一役買ってはいるが——半ば意図的なもの悲しい気持ちに陥る。マカンドリューズではこの雰囲気大切にしている。その証拠に、夜の帳がすっかり降りるまでは、カーテンを引いたり、電気をつけたりすることもない。黄色の光がここかしこに揺らめく中を通って行くとき——というのはすでに客足も多く、蠟燭があちこちで灯されていたからだ——再び厳肅な雰囲気被打たれた。長年に渡るしきたりで教会に似た静寂が醸し出され、客と

従業員双方で、落ち着いた格式ばった雰囲気食卓に与えられている。壁を背にし、海に面したいいつもの席につき、マーフィーがワインについての講釈を司祭気取りで囁いていたとき、「ボーイさん、ちょっと来てちょうだいな」と誰かが耳障りな声を張り上げた。僕たちはぎょっとした。

同時に声のした方を振り向いた。マーフィーを「ボーイ」呼ばわりした無作法を、僕たちは痛いほど感じていた。不届き者は約六フィートほど向こうの、部屋中央にある小さなテーブルに座っていた。誰も座りたがらない仕切りのない席で、一番大きなシャンデリアの下に孤立していて、混んでいるとき以外滅多に使われることがない。ははん、誰か下つ端のボーイが、ふだん見慣れない状況に面喰い、身の程を忘れてまずマーフィーに相談をするという手続きも踏まずに、このテーブルに案内したのだな、とこのときは思った。実際、この新参の食事客の出現は珍奇な出来事であった。彼女は長期滞在客ではなく、そのこと自体が妙なことであった。というのは、マカンドリューズはいまだかつて一度も、一見客を当てにするような種類のホテルではなかったからだ。そのうえ、彼女は同伴の男性もいない一人きりであった。こういう光景は見栄えがよくないばかりか、あつてはならないのだ。ご婦人は人前で、一人で食事をしながらが常識というものである。しかし、この飛入りの客に関してことのほか目を引いたのは、